

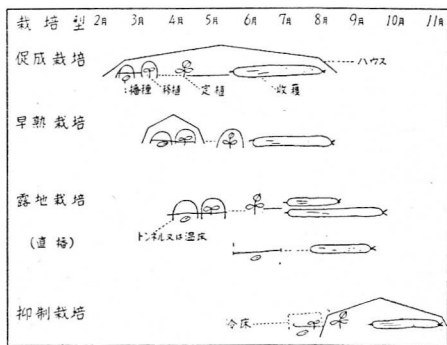
# キウリの栽培型と品種

中原 忠 夫

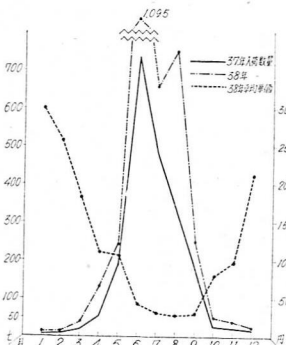
## キウリの栽培型

キウリは成長野菜の一つとして全国的に消費が伸びており、本道でも昭和三十七年は前年に比し一七％（札幌、帯広）の増加を見、札幌中央市場の入荷量も三七％と著しい増加を認められている。

キウリの栽培型は第一図のようにハウスを利用する促成、抑制栽培も見られるが、その大半は早熟、露地栽培である。札幌中央市場の昭和三十八年の月別入荷数量によると六月に入荷のピークがあり、（第二図）年間総入荷量の六四％は道外移入物によって占められている。従ってもっと道産物の出荷増が期待されると同時に、出荷時期と栽培型について検討しなければならぬ。最近の統計を見ると道



第1図 キウリの栽培型



第2図 札幌中央市場、キウリの入荷数量及び平均単価(昭和38年度)

内のキウリの作付反別は主産地の宅地化による移動と、労働力の減少によって作付の増加は足踏み状態で、むしろ減少の傾向を示している。

**促成栽培** キウリは輸送性が高く、促成しても、府県移入物との値差の少ないため、現在ハウスの大部分が収益性の高いトマトでふさがれている。僅かにハウスのローテーションとハウス内の加温を要しなくなった時期に簡易ハウスが利用されている程度である。



ハウス内のキウリ

ハウス栽培の播種時期は現在のところ二月下旬が限度で、定植期は四月上旬、ハウス内にトンネルをこしらえ保温する。育苗時期は勿論、定植期も寒さが残り、降雪も続くので、耐寒性の強いこと日照不足に耐える品種が要求される。勿論耐病性についても重要だが、管理の面から葉散も周到に行なえるのでそれ程重視されない。現在のところこれらの条件を充たす品種は少ないが、極端な短日にあっても雌花のつきかたが左右されない落合系の青葉と、青節成系の松のみどりがとりあげられている。

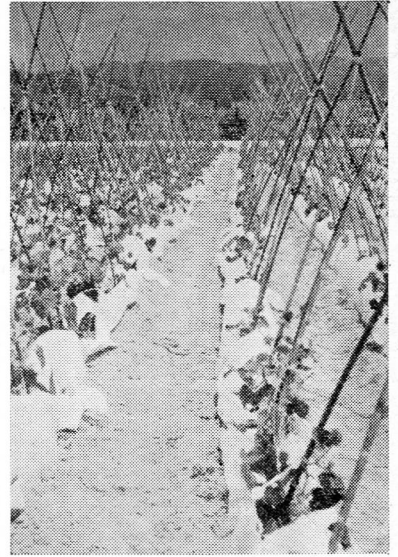


紙トンネル栽培のキウリ

ハウスの加温は電熱によるか、鋸屑ボイラーで沸かした温湯をあらかじめ土中に配置したポリパイプへ強制循環させて地温の上昇をはかる方法がとられている。ハウス内の定植距離は六〇センチ×四〇センチである。

**早熟栽培** ビニールまたは紙トンネルに定植する様式で、トンネル内の気温が夜間最低一〇度、地温が一二度C以上になる五月中旬頃に定植される。従って播種期は四月上旬となる。トンネルの地下部に電熱線を配置して加温する方法が一部で行なわれ、この場合、定植は約半月以上早めうる。

ビニールと紙トンネルの得失は費用の点で紙が安あがりになるが骨竹を多く要し、被覆に手間がかかる。しかしながら保温、管理の面ではビニールがすぐれている。紙はキウリの場合、短期間の被覆で春先の風当りの強い地帯を除き、トンネル内の温度が高くならないことと、光線の量が少ないので花着きがよく、換気、蔓あげの作業に手間を要しない利点をもっている。



紙トンネルに支柱を立てたところ

青長節成、小城青長節成で、福交二号など加賀胡瓜を中心としたF<sub>1</sub>である。

**露地栽培** この栽培様式は一般に広く行なわれている方法で、日長に感応の弱い加賀系品種を主体に、二〇日〜三〇日の短期育苗で六月上中旬露地に定植されている。

この栽培様式のうちの直播栽培は省力化の方法として注目をあびている。キュウリの露地播種は地温が一二度C以上になる五月下旬から始められ、収穫時期の点から七月上旬が限度になると考えられる。直播が主体なので長日性品種であること、収穫期間が短いから節成性を必要とせず、むしろ側枝の発生が良く、耐暑性、耐病性のすぐれている品種が要求される。

直播で一番問題になることは稚苗時におけるジノミの喰害、乾燥、高温障害によってべト病などに罹病し易くなり案内樹が長く保たせないことである。最も直播に適しているといわれる余時用の地這胡瓜にても同様のことがいえる。圃場での稚苗の周到的な管理、薬剤散布には限りがあり、栽培範囲が北海道では比較的せまい。従ってペーパーポットなどを使い極く短期間、稚苗の

ビニール、紙を利用するにしても定植当時はコモがけを行ない保温につとめなければならぬ。被覆期間はトンネルの大きさ、出荷のねらいによって異なるが、せいぜい二〇日から三〇日と考えられるので、蔓上げ時には収穫を始められる。

早熟栽培にとりあげる品種は日長、低温に対して鈍感なことで耐病性が問題になる。定植当時に周到な管理をしても夜間低温に遭遇することが多く品種によってはカンザシ苗になり易い。早熟栽培では面積が多くなり、被覆栽培になるため菜散にも限度を生じ耐病性、黒星病、炭疽病、べト病に強いことが要求されることになる。

更に早熟栽培品種の条件として露地栽培と同様収穫の打切り時期をどこにもって行くかということ、例えば旭川では八月に入るとキュウリの収穫を切りあげ白菜を入れていくが、札幌近郊では親蔓の収穫が終わると子蔓、孫蔓に成らせ晩秋迄収穫を続けているので分枝性も問題になる。現在これらの点から良好な成績をおさめているのは加賀

管理をして本葉発生前か、本葉一葉時に本圃に定植する方法を行なうことにより、収量も多くなり、適度の菜散がともなえば晩秋迄収穫を続けることができる。

品種としては支柱立の場合、加賀、立秋、早生三尺が良く、無支柱では立秋、早生三尺、地這などの樹勢強く果色の濃い白イボ系統がとりあげられている。肉質が良く皺の多い四葉も直播栽培に適している。



露地栽培のキュウリの生育

**抑制栽培** ハウストマトの収穫の終る八月上旬からキュウリを栽培する様式で、ハウスの周年利用という点からハウス経営者の殆どが試みる様になった。抑制栽培は育苗期が高温時に当り、結果期に入って温度が下がるため仕方、保温に多くの問題があり、現在のところ無加温でもっていついてるので収穫期間が九月から十月末と比較的短い。

抑制栽培の要点は第一に育苗で、日中の気温が二五度C以上にならないようヨシズをかけ、床も框を使わないで風通しを良く

する。育苗期間は二五〜三〇日に止め、移植も一回、経木鉢を使い、移植後日長時間を八〜九時間におさえて節成性を高め、八月上旬にハウスに定植する。第二は病虫害対策でハイロカビ病、黒星病、べト病を防ぐため苗床から菜散を三〜四日おきに徹底して行なう必要がある。葉としてはマシネブ、ジネブ剤を中心にアブラムシ防除のためスミチオンも入れる。特に八〜九月は台風季節で思うように換気できないこともあり、長雨も続くので尚更防除が大切となる。第三に保温と換気で、収穫盛期に入る九月下旬から気温が下がってくるのでハウス内の最低温度を一三度程度において保温をはからないと生育不良となる。温度がひどく下がる場合はコモがけを行なう

か、加温方法を考えなければならぬ。一方日中はつとめて換気しハウス内の過湿を抑えることも大切である。

抑制栽培の品種としては耐暑性と耐冷性の両方にすぐれていること、側枝の発生が少なく高い節成性をもち色付きの良いことが条件になる。実際には一二〜三節から着果し、分枝は密植(六〇×三五〜四〇)の關係で一葉残して摘芯を行なう。現在青節成系の亀立春秋が果形、色付、着果の点でまさりとあげられている。本種は育苗期の短日低温処理をかかせない。

品 種

北海道のキウリの品種は作りやすさ、早熟性、耐病性の点から加賀節成で代表されている。府県の多くの交配種は加賀系の交配種を除いて成績のすぐれているものが見当らない。しかし促成、抑制栽培の品種は今後の検討によらなければならぬ。現在栽培されている品種の特性については別表を参照されたい。

**松のみどり** 日本園研でハウス促成をねらいとして育成された品種で、低温下の弱光線下の結実性がすぐれ、雌花の着生も比較的低位から始まる。ハウス用としては葉大きく、節間長めだが、それだけ草勢強く果形のくずれない特長をもっている。

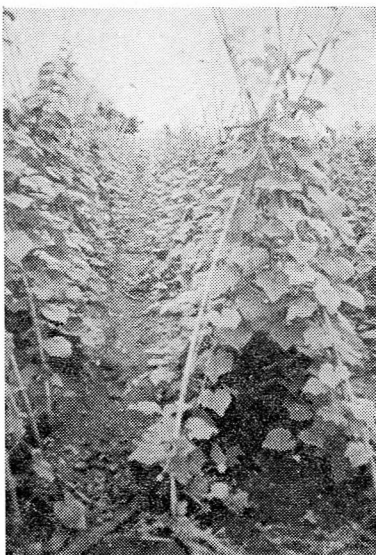
**福交二号** 草勢旺盛で特に育苗期の発育が良く、雌花の着生は安定している。早生で早期多収、果揃極めて良く、加賀、小域で見られるような首細にならず肩部から豊円で肉質も良いが、僅かに頰の下部が淡色になる。今後加賀にかわる優良種と考えられる。

**亀交春秋** 日長に対してやや鈍感だが、高温育苗にて雌花の着生劣るも抑制栽培品種としては寡日照下の色付き良く密植ができ、果揃い、品質もすぐれている。現在ハウス抑制に多くとりあげられている。

**地這系** 無支柱栽培用品種には四葉、早生三尺、立秋、地這などあるがいずれも長日性で主枝の着花少なく小蔓、孫蔓の第一節に雌花がつく、白イボ濃緑の種類である。このうちで四葉は稚苗時低

ハウス用の松のみどり

加賀節成キウリ



第1表 品 種 の 特 性

品 種	形 質	草 勢	分 枝	節 間 長	移 植 性	耐 暑 性	着 果 性		果			実		栽 培 型
							節成性	日感応度	長 寸	長 寸	色 沢	し ね	刺 色	
F <sub>1</sub>	青葉	強	中	短	強	—	強	敏	20~25	緑	中	黒	中	促成
F <sub>1</sub>	松のみどり	強	中	長	強	—	強	敏	17~20	緑	少	黒	中	成(抑制)
F <sub>1</sub>	小城	強	中	長	強	—	強	敏	20~25	濃緑	中	黒	中	成熟露地
F <sub>1</sub>	加賀	強	少	長	強	—	強	鈍	20~25	濃緑	中	黒	中	早熟露地(直播)
F <sub>1</sub>	二院	強	少	長	強	—	強	鈍	25	緑	中	黒	中	早熟露地
F <sub>1</sub>	聖護	強	少	長	強	—	強	鈍	25~30	緑	中	黒	中	早熟露地
F <sub>1</sub>	四葉	強	多	中	弱	強	中	鈍	30~40	濃緑	多	白	中	良直播
F <sub>1</sub>	成四	強	多	中	弱	強	中	鈍	30	濃緑	多	白	中	良直播
F <sub>1</sub>	わ合	強	中	短	強	—	中	敏	25	濃緑	少	白	中	良直播
F <sub>1</sub>	落成	強	中	短	強	—	中	鈍	20	緑	中	黒	中	良直播
F <sub>1</sub>	三節	強	中	中	強	—	中	鈍	25	緑	中	黒	中	良直播
F <sub>1</sub>	秋尺	強	中	中	強	—	中	鈍	40	濃緑	中	白	中	良直播
F <sub>1</sub>	地這	強	中	多	弱	強	弱	鈍	30	濃緑	中	白	中	良直播
F <sub>1</sub>	交春秋	強	多	少	強	強	強	鈍	30	濃緑	中	白	中	良直播
F <sub>1</sub>	亀	強	少	短	強	強	強	鈍	20~25	青緑	少	黒	中	抑制

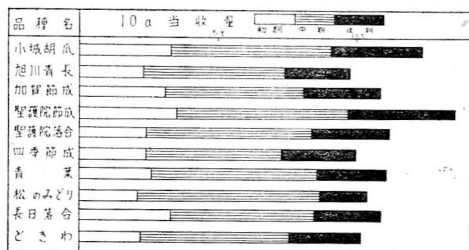
温にあうと下位節に着花しやすい性質がある。強いて整枝する必要はないが支柱を立てた場合、二、三節の子蔓をとり除き主枝を誘引すると支柱ののぼりが良くなる。地這作りの場合根元に敷藁して五、六節以下の主枝上の雌花を摘むと草勢良くなり多収

☆

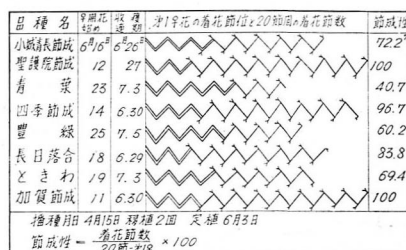
☆

☆

(上野幌育種場)



第4図 キウリの品種比較試験 (昭36 旭川学大)



第3図 キウリ品種の節成性(昭36 北海道農試)